



# Shin-Kobe 漢方薬だより

1月号 (Vol.6)

## 風邪と漢方 その2

前回は葛根湯のお話をしましたが、風邪に用いる漢方薬は他にもいろいろあります。漢方の考え方では、風邪は体の表面から段階的に中の方に入っていくとされています。最初は体の表面の症状として頭痛や寒気、関節痛がおこり闘病反応としての発熱がみられます。そこから咽頭痛、さらに下痢など体の中へ進んでいきます。葛根湯はその最初の表面の段階に用いられるお薬です。ところがもともと体力がない虚弱な場合には、体の表面のバリアー機能も乏しく、いきなり体の中へと症状が進んでしまう場合があります。このようなときには寒気や倦怠感が強く、発熱はみられないか、あっても微熱程度で漢方薬として麻黄附子細辛湯が用いられます。特に「のどがチクチクする」風邪に効果的とされています。体調は日々変化しますので、普段元気な人でも疲れがたまって体力が低下した状態ではこの漢方薬が効果的なことがあります。麻黄附子細辛湯は名前の通り麻黄、附子、細辛の3種類の生薬から構成されており、麻黄は体の表面にも効果がありますが附子や細辛は体の中から温める生薬です。これらの生薬には体の冷えに対して温める効果があるうえ、抗炎症作用もありますので、風邪以外にもアレルギー性鼻炎、寒冷じんましん、神経痛などにも用いられることがあります。麻黄附子細辛湯の医療用エキス製剤ではカプセル剤型もあり、漢方薬の味が苦手な方でも内服しやすい風邪薬と言えます。

副院長：岡田 直己



糖尿病・内分泌・漢方内科 新神戸おかだクリニック

電話：078-241-1350